

考古学的資料からみた吐蕃と中央アジア及び西アジアとの古代の交通（上）

——あわせてチベット西部において仏教が吐蕃に伝来した過程での地位を論ず——

霍 巍
高 橋 庸 一 郎（訳）

唐朝の貞観初年、ソンツェン・ガンポ（松贊干布）が高原の諸部族を統一し、首都を邏些（今のラサ）に定めた後、吐蕃王朝は正式に成立し、ひきつづいて急速に強大化の道をたどった。紀元七世紀から八世紀にかけて、吐蕃は一方で東に向かって発展し、中原の唐王朝と密接な関係を持つにいたったが、また一方では、象雄を征服した後の有利な態勢に乗じて、象雄の旧地を基地として、西へ、南へとその勢力を発展させ、前後して勃律、迦湿弥羅（カシミール）、吐火羅、于闐などの中央アジア各地及び天竺、泥婆羅（ネパール）などの南アジア各国とそれぞれの程度に応じた接触と往来をおしすすめ、政治、経済、文化などの各方面に亘る関係を実現させたのであるが、こうした状況下で吐蕃はこれらの国家或いは地域との間に主要な交通ルートを形成したのである。これ等のルートの開通は、仏教文化が吐蕃王朝という時代に大規模にチベットに伝来するのに必要な条件をつくりだしたのである。本文は前人の研究の基礎の上に、近年来新たに発見された一連の重要な考古学的資料を結合して、再度これ等に検討を加え、識者方々の御教示をおがんと願うものである。

一 早期仏教のチベットへの伝播

仏教は紀元前六世紀に北インドで成立し、紀元前後にはすでに西域を通して中国本土に入っていた。仏教がチベット高原に伝来した時期¹⁾については、いままで学術界では一般に紀元七世紀に吐蕃が興起してから後のこととされてき

た。しかしチベットのチベット語古史資料²⁾の記載によると、仏教が最も早くチベットに伝来した時期はソンツェン・ガンポより五代前で、ほぼ紀元五世紀前後とみとめられる。例えば有名なチベット語文献の『青史』には次のように記載されている。

拉托托日年贊王在位の時、『釈迦囉呢陀経』及び『諸菩薩名経』などが天から降った。それを敬虔にたてまつった結果、国政と王の寿命は末永きを得た。これがチベットが仏教の教えを得た最初である。倫巴班抵達は次のように言っている。当時本波は楽しき天空を意味したので、天から降ったと言うようになったのである。実際は班抵達洛生措（慧心護）と訳師里梯生とがこれ等の仏典をチベットへ持って来たのである。しかしチベット王はその経を識らず、またその意味も解らなかったので、そこで班抵達と訳師はインドへもどっていったのである。³⁾

外国の学者達はこの点の見かたについて意見は同じではない。たとえばドイツの学者ホフマン（H. Hoffmann, 1912～）はかつてこれに対して論評を加えて、「チベット人はまだ伝説をのこしており、ツアンポより五代前の拉托托日王の時代と言え、当時はまだキルルン（雅隆）一帯のみを統治する小国であったので、天上から百拝懺悔経、仏塔、仏像などが降ったとしたのである。しかしこれは単なる伝説にすぎないし、恐らくボン教の伝説をそのままうけついでいる可能性が大きい。なぜならボン教の伝統では、すべてのものは天上からやってくるのであ

り、天に対して非常な崇敬の念を持つからである」⁴⁾といい、またイタリアの学者トゥッシィ(G. Tucci)は断言して、「いかなる事でも、吐蕃で広く伝播された事などすべてはソンツェン、ガンポに帰されるのである」⁵⁾との述べながらも、しかし彼は同時にまた、「当然我々には仏教の教理が各種のコース(たとえば中央アジア、漢族地域、ネパールなどの地区)をたどって、ソンツェン・ガンポ時代より前に(それも分散的に)吐蕃に伝来した可能性を排除するわけにはいかない」⁶⁾とも認めているのである。

それでは、仏教は結局ソンツェン・ガンポ以前に、いづこかのコースをたどってチベットに伝来した可能性はあるのであろうか?筆者の見方は肯定的である。その理由は、第一に、ある研究者がすでに指摘しているように、紀元5世紀頃の吐蕃周辺地区では、仏教はすでに隆盛をみており、仏教の伝播の拡大にとって有利な環境を形成していたこと、これは仏教のチベット伝来にとって客観的に好条件を提供⁷⁾していたといえる。第二に、この伝説は仏教がチベットに伝来する方式が結局は「天から降る」とされ、これはボン教の「天」に対する崇拜特徴を有しているもので、そのことは早期の仏教伝播とボン教との間には何等かの関係が存在していたことを暗示し、チベットに於ける宗教の発展の糸ぐちとしてはうなづけるものがあり、比較的信頼出来るものである。第三に、更に重要な証拠としては、チベット西部とその周辺国家或いは地域との間には、事実上ずっと早くから経済、文化の交流或いは貿易の為の従来からのルートが存在していたということである。筆者は以下の文に於いてこれ等の古道について論及していくつもりである。ここで先づそれに関係する二つの問題を検討してみなければならない。

最初に、チベット西部地区は早期仏教が伝播するに当たって独特の位置で占めていたということである。石泰安は指摘して、チベットの西部地区はチベット文明の形成に重大な作用をほたし、「その地は既に健陀羅や烏仗(斯瓦特)と場を接し、またその地区のその他の小国、毗

隣、希臘、伊朗(イラン)、インドなどの文明の中の古老の部分がすべてその地を経由して吐蕃に伝わったのである」⁸⁾と言っている。

象雄の時代にすでにその文明の基礎がおかれたことにより、我々は当時ボン教文化の重要なセンターとして、その影響力の及ぶ範囲は極めて広いものがあったということを肯定するのである。以下はつきりとした証例をあげてみよう。

すでにある史料が表明しているように、象雄の領域内の有名な「神山」は岡仁波切(ガンニンブチェ、即ちガンジス山)を中心として、当時南アジアや中央アジアから多くの巡礼者をひきつけていた。ボン教の中では、その山は「九重万字の山」と称されていた。いわゆる「九重万字」とは亦た即ち雍仲ボン教の象徴的符号の「卍」である。仏教の中で最も有名な須弥山も即ちこの山を指しているのだという意見もあり、山頂はつまり帝釈天の居する所であるとするのである。そしてまた大体仏教と同時に起こった印度耆那(ジャイナ教)もまたこの山を其の創始者瑞斯哈巴那刹が解脱を得た山とみなして、この山を「阿什塔婆達」、即ち「最高の山」と称しているのである。古代印度教(ヒンズー教)はこの山を「凱拉斯(カイラーシ)」と称して、其の主神の一人湿婆(シバ神)の住む山とされているのである。

こうした特殊な文化現象に対して、我々はただ一つの合理的な解釈が出来る。それは「世界の屋根をおおう屋根」という阿里(ガリ)高原は、至高無上の地理的な位置にあるということとガンニンブチェ(カイラーシ山)が具有している豊富な象徴的意味によって、早くも仏教が伝入する前の象雄の時代に、すでに古代の宗教的文化の薈萃の地となっていたのである。石泰安の言う如く、「其の地理的位置の理由によって、象雄は誰れはばかることなく印度に向かって開放され、それは或いはネパールを通り、或いはカシミールとラダクを通るルートとしての存在であった。印度人はガンジス山を一つの神山と見なしていたから、つねに熱い宗教的思

いをそこに向けていたのである。我々は彼等がいつの頃からこの山を聖なる山として崇めるようになったのかを考証するすべをもたない、しかし象雄がまだ吐蕃の領土の一部にくみ入れられる前にまでさかのぼることが出来るようである⁹⁾という推測はまちがいないところである。石泰安はボン教と仏教の間の相互関係を論述したとき、更に一つの証例を挙げながら西部阿里(ガリ地区)が仏教文化の伝入をうけ入れるに当たって、特殊な宗教的基礎を有していたことを説明している。

我々はすでに別の機会に指摘したことであるが、インド人にとっての聖山ガンジス山を内にふくむ象雄地区には過去にかけて一つのヒンズー教という烙印を深くおされた宗教が存在したことがあった。こうした情況は結局非常に長期にわたったのである。事実上、950年前後、迦布邏(カブール)の印度王国は一体の罽賓(カシミール)式の毗湿奴の塑像(三つ頭を持つ)を持っていて、彼は自分でそれは吐蕃の贊普(ツアンブ)の所から得たものだと言い、また後にはガンジス山から得たものだとも言っていたのである。これはつまりボン教が人々のはかり難いやり方で仏教の吐蕃へ伝入する為の条件を準備したことを説明するものである。なぜならその像はインド、イランのいくつかの要素を吸収していて、それはまだラマ教(引用者注:チベット仏教を指す)に類する要素が一切なくそれらが発生する前のものだからである。¹⁰⁾

故に我々が早期仏教のチベットへの伝入というこの問題をかながえる時には、必ずチベット西部のこの特殊な点に十分な注意を払わなければならない。次に、『青史』の早期仏教のチベットへの伝入の具体的な内容についてその見方を少し述べてみたい。『青史』の記載の分析から、拉托托日王の時期に吐蕃に伝られた仏教関係の物品の中に、『釈達嘛呢陀羅尼』経が有るが、これは印度仏教の密宗の經典にほかならない。それではこれは最も早く吐蕃に伝入した仏

教の内容にはすでに密宗的な部分があふまっていたことを意味することになる。このような可能性について、王輔仁先生はかつて、「インド仏教の密宗的なものを天から降ったものだといふのは、もちろん後人の意識的な附会である。事実上この時インド大乘仏教の顯宗はまだ完全に衰亡していた訳ではないし、密宗はまだ大いに発展していたという訳でもない、なのにどうして密宗が五世紀に吐蕃にもたらされるということが有りえようか?この神話をつくり出した人間には意図的に仏教の密宗を一步先じさせようとしたのであり、後になって密宗が吐蕃に伝入されるに当たって人々が反対しえないように一本の伏線を引いておいたのだ。なぜなら天から降って来たものとすれば人々は反対出来ないからである。」¹¹⁾と指摘したことがあるが、この解釈は私には説得力があると思われる。しかし、私にはまだもう一つの可能性を提起出来るように思われる。それは早期に吐蕃に伝入した仏教が、いくらかの大乘仏教以外の内容をふくんでいる点を考えると、後期の密教とみとめられるのではないかということである。そしてとりわけチベット西部地区ではそれがより濃厚であったのではないかということである。

(1) 印度の湿婆教(バラモン教)からの影響を考えることが出来る。

チベット西部周辺はバラモン教の影響を深く受けた地域である。杜斉はかつて「勃律と迦湿弥羅(カシミール)は一つの主にバラモン教の影響をうけた宗教地区であり……広々とした辺疆の象雄地区はその自分の宗教思想を改変しようとする意志があったばかりでなく、域外から伝来した思想の反映もあった。ボン教の伝説の中にはもう一つの地区つまり大食がある。この名詞はチベット語文献の中では一般に伊朗(イラン)とイラン語をしゃべれるけれどイスラム教の統治を受けた社会を指すのである。いずれにせよこれはすべてははっきりとバラモン教によってその教義内に影響をうけているということを示している」¹²⁾と述べたことがある。よ

ってインド後期に起こった仏教密宗は、多くバラモン教の内容を吸収し、両者の間には非常に密接な関係が存しているのである。こう考えると、本来バラモン教に属していた内容を後期密宗とは相互に混淆したという可能性があるのであるのではないだろうか。

以上述べた事を統合すると、次のような推測が可能である。もし拉托托日年贊の時期に本当に仏教の主要な要素が吐蕃に伝入了たということであれば、この時期の仏教は、チベット西部近隣の迦湿弥羅(カシミール)地区と一定の関係が存在していた可能性が大いに有るから、その教義はたしかにインドの大乗仏教以外の何らかの要素が混入していたにちがいないということである。¹³⁾ この推測が成り立つかどうかは、更に多くの資料によって実証されねばならないであろうことは当然である。

(2) 小乗仏教からのある種の影響を考えることが出来る。

吐蕃と場を接する西域各国に最初に伝入された仏教は、多くは小乗仏教が主であった。西域北道のキジ国では、『高僧伝、鳩摩羅什伝』の記載によれば、紀元四世紀中葉に到るまで、やはり小乗仏教が中心であった¹⁴⁾。その最も代表的なものは于闐である。この地方の早期仏教の伝入に関する記載は多く神話伝説化されており、吐蕃の情況と極めてよく似ている。『大唐西域記』の中では于闐を『瞿薩旦那国』と称しており、この国の国王は自から称して「毗沙門天の子孫」¹⁵⁾ であると言っており、チベット語古籍の中にも同様な記載がある。ここに言う「毗沙門天」はもとインドの婆羅門(バラモン)教の中の北方保護神であり、後に仏教に吸収されて、仏教の護法神「四天王」の一人となったもので、とりわけ仏教の密宗の中では非常に流布した神である。最も注目し値するのは、『大唐西域記』の中に更にもう一つ于闐の仏教が伝入了たことについての伝説が記載され、そこでははっきりと于闐はもとと仏を信じず、後になって迦湿弥羅(カシミール)の「毗盧折那阿

羅漢」から于闐国王に対して勧誘があった後、「王遂に礼を請い、忽ち空中より仏像の下り降りるを見、王に犍椎を授け、因って即ち誠信し、仏教弘揚す」¹⁶⁾ と述べられており、ここでもまた仏像は天から降ったものと述べられ、『青史』の記する所の吐蕃への早期仏教の伝入の方式とほとんど完全に一致しているということである。

以上述べて来た事を総合すると、次のような一つの推測が可能であるように思われる。即ちもし拉托托日年贊の時期に果して本当に仏教が吐蕃に伝入了たということであれば、この時期の仏教はチベット西部近隣の迦湿弥羅(カシミール)地区と一定の関係が、存在していたから、その中には必ずインドの大乗仏教以外のいくつかの要素を排除することなく残存させていたにちがいないという可能性が非常に濃厚であるということである。当然この推測が成立するかどうかは、更に多くの実証的材料の出現を待たねばならない。

二 吐蕃から中央アジア地域に入る主要なコース

ここに言う「中央アジア」というのは中国新疆地区を包括する地域で伝統的に「西域」と呼ばれている所に含まれる。吐蕃が最も早く中央アジアに出現をはじめるのは、日本の学者森安孝夫の考証によれば、吐蕃の芒松芒贊時代であり、中原の唐王朝龍朔二年(662年)に当る¹⁷⁾。

森安孝夫は、地理的条件から見て、当時吐蕃は中央アジアにつながるルートを二本持っていた。一つはチベット中部(吐蕃王朝の発祥地)から西北の喀喇崑崙、帕米尔(パミール)に至るコースであり、もう一つはチベット東北から青海、柴達木に行くコースである。¹⁸⁾

文献上から見れば実際は当時この二つのコース以外にもまだ存在していたのである。しかしいまま少くともそのうちの二つを挙げることが出来る。

一つは西に行って勃律、繞道葱嶺を経て西域

に入る、いわゆる「勃律道」で、このルートはすでに多くの研究者が論及したことがある。そしてもう一つは¹⁹⁾、吐蕃から象雄(羊同)を経て、迦湿弥羅を通して中部天竺に入るコースである。『新唐書・西域伝』の記載によれば、この道は吐蕃から勃律へ向かって進出するのを抑制することが出来る道でもあり、「吐蕃五大道」²⁰⁾とも称されている。筆者はこの道は「勃律道」の一部を為すものである可能性が非常に強いとみている。

上に挙げた諸道の中で、西北の喀喇崑崙、帕米尔(バミール)から西域に入る道は「中道」とも称され、具体的に言うともこれもまた二つのコースに細分出来るのである。一つは崑崙山と喀喇崑崙山の間の阿克賽欽地区をつきぬけていくコース。もう一つは于闐南山(崑崙山と喀喇崑崙山)を越えて西域に入るもので、「吐蕃—于闐道」をも称されるべきコースである。後文に於いて于闐と仏教のチベット伝入の関係を些か詳細に論じようと思うので、ここで「中道」の状況に少しくわしい分析を加えておくことにしよう。

吐蕃と于闐の相互の地理的位置関係については漢文史料の中にすでに多くの記載がある。たとえば『随書、西域伝』の于闐国の条には、「于闐国は、葱嶺の北二百余里。東に鄯善を去ること千五百里、南に女国を去ること三千里、西に朱俱波を去ること千里、北は龜茲を去ること千四百里」と記されており、この女国とは大羊同国、即ち象雄のことである。『釈迦方志』には、「大羊同国」は、東は吐蕃と接し、西は三波珂と接し、北は于闐と接す²¹⁾と記されている。

故に吐蕃から于闐に行く道路は、其の起点が森安の云ようにチベット中部からではなく、チベット西部の象雄から始まるのである。

中道の開通は、チベット西部と中央アジアを関係づけるという点において極めて深い影響を与えた。しかし中道の開通した時期については、文献上には明確な記載がない。近来、ある学者は女国(羊同)を北方の突厥との関係からこの

道の開墾をさぐって、この二者の間には恐らく一本の古い「食塩の道」、即ち「女国が北方の突厥の地から食塩を得て、再びそれを天竺や吐蕃に売るのであるが²²⁾、その為の道があったと提起している。しかし実際上は、羊同本土も重要な塩の産地であり²³⁾、必ずしも北方の突厥の地まで塩を獲得しにゆかなければならなかったわけではない。このことは『随書、女国伝』にははっきりと女国は「尤も多なるは塩なり、恆に塩を天竺に興販し、其の利は数倍なり」と記されているから根拠がない訳ではない。近年新たに発見されたいくつかの考古学的資料から見ると、中道は少なくとも吐蕃が羊同を併呑するずっと以前に形成されており、すでにチベット高原と中央アジア古国間の物資文化交流の重要なルートになっていたのである。1990年9月、チベットラサの曲貢村で石室墓が発掘されたが、その中の一つの墓から一枚の鉄の柄のついた銅鏡が出土した²⁴⁾。この種の形をした柄のついた鏡は、中国の黄河、長江流域の唐以後の時代に見られる柄のついた銅鏡がぞくする文化系統には入らないものであるということは断定出来る。世界的な文化範囲から言えば、古代の銅鏡は大体東西二つの大きな系統に分けることが出来る。一つは中国を代表とする東アジアの、中央に紐をつける為の突起をもった円形銅鏡の系統であり、いま一つは西アジア、中近東及び中央アジアの古代文明の中で流布した柄のついた鏡の系統である。曲貢村の石室墓から出土したこの柄つき鏡は、うたがいがなく後者に属するものである。

いまのところ知り得る考古学的資料によれば、曲貢石室墓のこの形の青銅の柄つき鏡に類似するものは、過去蔵南溪谷地区で発見されることがあり、その形は曲貢の柄つき鏡と同じである²⁵⁾。

注意しなければならないことは、筆者の研究によれば、この類の柄つき鏡はチベット以外で、中国領域内で最も多く出土しているのは新疆地区である。例えば輪台の群巴克墓葬²⁶⁾、新源の鉄里木克墓地²⁷⁾、坎乃斯種羊場石棺墓²⁸⁾、和静

察吾乎溝口二号墓地²⁹⁾、吐魯番艾丁湖古墓³⁰⁾などでそれぞれかつて出土したことがある。年代の比較からみれば、新疆出土の柄つき鏡の年代はすべてチベットのより早く、新疆のものは最も早いので西周期にまでさかのぼり、最も早いものは漢代のものであり、大体紀元前十世紀から紀元前後にいたるまでの期間のものである、そしてチベット出土のもの年代は初歩的な研究によれば春秋戦国から後漢の時期に当り、大体紀元前五世紀から紀元三世紀までの範囲内に入る³¹⁾。故に、チベット高原の柄つき鏡は、新疆から伝入した可能性が非常に高い。阿里(ガリ)高原に仏教文化が伝入した後に制作された壁画の中に、やはり柄つき鏡を手にした人物のすがたが保存されていて³²⁾、その柄つき鏡の形を観察すると、新疆地区で出土したものほとんど同じである。これは一方で柄つき鏡を使用する伝統がチベット西部では多分可成り長期間つづいたということを説明し、また一方ではチベットの柄つき鏡の来源は、古代の象雄(羊同)を通して吐蕃の中心部へもたらされたということを証明するものである。

更に一步すすめてさかのばればまだ解くことがある。それは新疆地区のこの種の柄つき鏡と中央アジア一帯の同種の鏡の形との間には実際上非常に密接な関係があるということである。その形を配列してくらべてみた結果からみるとこの新疆地区から出土した柄つき鏡の形に最も近いのは、葱嶺以西の米努斯克盆地を中心とした区域で発見された青銅柄つき鏡であるばかりでなく³³⁾、この地区で出土した青銅鏡の年代はまたいづれも新疆地区のものよりも早いのである。故に、我々はチベット出土の柄つき鏡は、新疆地区を通して、中央アジアからチベット西部へ伝入し、そして更に吐蕃の中心地区に入ったのであるとみなすことができる。この伝来コースが後の「中道」に当る可能性は極めて大きいのである。

この外、考古学的に発見された古代の岩画も、古代の象雄と其の北方の阿克賽欽、克什米尔(カシミール)などの地と、すでに早くから一

定の交通関係があったということを表明している。

近年来、新疆地区の文化考古学にたずさわる人達は葉城東西の達布達布、布侖木沙、普薩及び皮山などの地で、多くの岩画を調査発見した。えがかれているのは主に山羊、大角盤羊、ヤクなどの動物や狩猟の場面である³⁴⁾。岩画の内容や題材、風格や技法は阿里(ガリ)地区で発見された岩画と全く同じであり、これは其の時代が近いということと、岩画の作者の部族も同じであるということをも証明していると言える。この部分の岩画の中にもまだ仏教的な内容のものは発見されていない、故に新疆の考古学に携った者はその制作の年代を紀元前後と推定しているということを一言つけ加えておかねばならない。

1979年、ドイツ、パキスタン、フランスなどの学者で構成された考古学調査隊は中巴公路(又は喀喇崑崙高山公路とも称されており中国とパキスタンを結ぶ道路)にそって考古学的調査を行った。この道路は南パキスタン北部の印度河谷平原にはじまり、つづいて西に向かってヒマラヤ山脈西端の高山峡谷に入り、それから帕尔巴特峰付近を通して、こんどは北に向かって喀喇崑崙高山の中の吉尔吉特溪谷と洪扎溪谷に入ると、最後に中国とパキスタンの国境の紅其拉甫山口に到るのであり、北は新疆葉城とつらなり、南は今の新疆チベット公路に沿って阿里日土に到るのである。漢以来の「罽賓道」は、大体この道に相当するのである。

この古道上で調査発見された岩画と岩刻図は大体四期に分けることができる。最も早い一期は紀元前五千年から紀元前一千年ぐらまでで、この時期の岩画の内容にはすべて仏教的なものはなく、紀元前一千年頃の岩画の中には、西伊蘭人と塞人の岩刻が出現している。第二期は仏教伝入初期のもので、大体紀元一・二世紀のものであり、貴霜王朝及びその前後の時期に相当し、主な内容は塔に対する礼拝奉教である。第三期は仏教流行の時期で、約紀元五から八世紀で、主な内容には塔、仏伝、本生故事、仏像

などがある³⁵⁾。今のチベット阿里(ガリ)地区の古代岩刻図には、基本的に非仏教的内容の岩画と仏教伝入後の岩画とに分けることが出来、具体的な年代は更なる研究の進展を待たねばならないが、しかし岩画の内容と彫刻の技法などから観察すると、カシミール環境内の岩画とこの岩画は互いに非常に類似した要素を有しており、例えば作画の方式はすべて先端のすどくとがった石のかけらか或は金属器で岩石の表面に陰刻の刻線で図案がほってある。早期は動物と狩猟の場面が多く表現され、晩期になって仏塔、仏像やその画などがあらわれているので、これはこの二者の間にもある種の関係が存在していることを表している。

以上述べた考古学的資料は、我々の見方を実証するものである。つまりチベット西部と其の北部の阿克賽欽、喀喇昆侖と昆侖山を通過して新疆の葉城一帯とを結ぶ交通ルートは、最もおそくとも古い象雄の時期にはもうすでに開通していたということである。このコースをたどれば、西へ向かって喀喇昆侖山口を越えて印度、パキスタン及びカシミールへ到ることが出来、北へ向かへばそのままパミール高原を通過して葱嶺の西に到ることが出来るのである。

このコースの起点は、文献と考古学的資料の両方を分析すると、大体今の新チベット幹線公路と重なり、つまり南は阿里(ガリ)高原の日土(旧訳は魯多克³⁶⁾で、古象雄即ち羊同の管理下の地)からはじまり、界山大坂、阿克賽欽湖、泉水溝、大紅抑灘、康西瓦を経て、北は葉城、皮山などの地にいたるのである。唐代の文献記述の中には、当時の僧侶達がこの道を利用してインドへ行ったことを表しているようにとれるものがある。たとえば義浄(635~713)は『大唐西域求法高僧伝』の中で玄照について述べているが玄照は恐らくこの道を通してインドへ行ったものと思われる³⁷⁾。また別に義浄の記述によると玄照以外にも、まだ隆法師、信胃及び大唐の三僧などといわれる人々も恐らくこの道を經由してインドへ行ったのである³⁸⁾。その後、

紀元十世紀ペルシャの佚名の作者ではあるが『世界境域志』や紀元十一世紀やはりペルシャの文章家加尔迪齐(Gardizi)の『記述された装飾』などの史籍には、西域から吐蕃へ行く道路に論及した所があって、それも和田(ホータン)から阿克賽欽を通過して吐蕃に行く道を挙げており³⁹⁾、大体これらもこの中道を指して言っているものと考えられる。

吐蕃から西域に行くコースは、上に述べた幹線以外にもまだその他の「借道」を通るという形式で西域に向かう道路もあった。王小甫の考証によれば、それ等の道路は包括すると、大勃律~謁師を取って護密へ向う道、謁師から淫薄健へ向う道、箇失密から乾陀羅を通過して謝颯道へ向う道などであって⁴⁰⁾、みな葱嶺を起えて西域へ入るのである。

上述の吐蕃から西域へ入るコースは、それぞれ異なった時期に開通し、或は利用されたのである。吐蕃に関連してその西域での活動史を、王小甫は大体四つの段階に分けている。即ち吐蕃が羊同を征服し、いわゆる「食塩の路」、これは本文で論ずる所の「中道」であるが、それを支配下においた時期、次に唐朝が兵をくり出して四鎮を防守した後、吐蕃が重点を西にうつして葱嶺越えの道を開いた時期、更に唐が小勃律を支配した後、吐蕃が改めてタリムから東南に向って西域に入った時期、そして最後に吐蕃が唐の安史の乱に乗じて安西を取り、草原上の伝統的な南北交通ルートを開いた時期である⁴¹⁾。この説には従うべきものがある。しかしその中で最も早く開通し、最もよく利用され、チベット西部と最も密切に関係したルートは、筆者の見方によればやはり吐蕃が早期に西域と往来した主要な道路、即ちそれは中道であり、或は「吐蕃一于闐道」とも称されるべきこの道である。

【付記】

注釈については(下)に一括して掲載する。

(1996年4月10日受理)